

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520109

研究課題名(和文)戦後日本美術における吉原治良の海外戦略

研究課題名(英文)Strategy of Yoshihara Jiro in the Context of Japanese Postwar Art

研究代表者

加藤 瑞穂 (Kato, Mizuho)

大阪大学・総合学術博物館・招へい准教授

研究者番号：70613892

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、戦後日本美術を代表する前衛美術グループである具体美術協会(略称：具体、1954-1972年)のリーダーであった吉原治良(1954-1972年)が、いかに海外の美術関係者と交流し、具体の活動を海外へと展開したか、その具体的過程と戦略の解明を試みた。成果として挙げられるのは第一に、大阪大学総合学術博物館寄託の具体関連資料および海外に保管されている具体関連資料のうち、書簡の簡易データベースを作成した点、第二に、海外の美術関係者も頻りに訪れた具体の活動拠点であるグタイピナコテカについて、その意義と課題を考察した論文を執筆し、本論を含む書籍の発刊や展覧会の開催により成果を発表した点である。

研究成果の概要(英文)：This study focused on the strategy of Yoshihara Jiro (1954-1972) who was the leader of Gutai Art Association (Gutai, 1954-1972), one of the major avant-garde groups in the Japanese postwar art, for the promotion of its activities outside Japan. The first result is a primary database of correspondences among the Gutai documents deposited to the Museum of Osaka University as well as those related to Gutai in the institutes abroad. The second result is an essay about Gutai Pinacotheca which became the center of Gutai activities, and many foreign artists and critics visited just after its foundation in 1962. The essay is based on the arrangement and the research of Gutai documents deposited to the Museum of Osaka University. Most of them were shown at the special exhibition "The Era of Avant-Garde Osaka" at the Museum (April 7-July 6, 2013), which was accompanied by a book "Avant-Garde Art in Postwar Osaka" from Osaka University Press in 2013 including the essay mentioned above.

研究分野：美術史(近現代美術)

キーワード：具体美術協会 吉原治良 戦後日本美術 前衛 海外戦略 海外との交流

1. 研究開始当初の背景

具体美術協会（以下、具体）については、1980年代からヨーロッパで再評価の気運が高まった。1990年代以降は、具体のリーダー・吉原治良が居住していた芦屋の市立美術博物館が中心となって、グループの回顧展や会員各人の個展の開催、カタログの発行などにより基礎研究が進み、2011年3月まで同館学芸員の一人であった本研究代表者も、それらに積極的に携わった。ただそれまでの研究で中心を占めていたのは作品の調査分析であり、その歴史的文脈はまだ十分に考察されていなかった。

また、当時同館寄託であった関連資料は膨大な点数であったため、すべてを精査するには至っておらず、特に印刷物になっていない書簡類は大半が未整理のままという状況であった。

2. 研究の目的

本研究は、2011年4月より芦屋市立美術博物館から大阪大学総合学術博物館へ移管された、具体に関する寄託資料の整理・分析を通して、吉原がいかに海外の美術関係者と交流し、具体の活動を海外へと展開したか、その過程と戦略を解明することを目指した。その中核を占めるのは、第一に、吉原が国内外の美術関係と交わした書簡の整理と調査、第二に、具体の活動基盤となり、海外の美術関係者も頻繁に訪れたグタイピナコテカ（具体美術館）の実態調査であった。

具体は、日本のみならず世界を視野に入れた戦後美術史を語る上で、今や不可欠な前衛美術グループだが、その本格的な研究は、国内外でようやく緒に付いたばかりである。日本語の研究書はいまだ刊行されておらず、参照すべき研究論文も数えるほどで、大半の文献は概説的な内容に留まっており、数十年前の不正確な記述がそのまま引用され続けるケースも見受けられる。多数の未発表資料を元にした本研究は、そうした状況を好転させるための基礎研究の一つと位置づけられ、また具体についての新たな解釈を提示すると共に、日本の国際的文化交流において稀有な事例を検証する試みとも言える。

3. 研究の方法

平成24年度から3年間にわたって次の3つの方法で研究を進めた。(1)を中心とし、それを補足する目的で(2)、(3)に並行して取り組んだ。

(1) 大阪大学総合学術博物館の具体関連寄託資料のうち、書簡ならびにグタイピナコテカ関連資料について、主に大阪大学大学院文学研究科学生の協力を得て整理を進めた。原則として1点ずつ透明の保存袋に入れ、前者は消印もしくは差出日順に並べ、後者は通し番号を付けた後、それぞれの簡易データベースを作成した。

(2) 吉原ないし具体から送られた資料が保

管されている海外の各機関で調査を行い、そのうち書簡について(1)のデータベースに統合した。

(3) 元具体会員や関係者に、グタイピナコテカや海外との交流について聞き取り調査を行い、録音記録の要約を作成した。

(1)(2)のデータベースと(3)の要約を元に、吉原の海外戦略に関する論文、グタイピナコテカに関する活動年表、文献表をまとめ、書籍として刊行すると共に、展覧会においても成果を発表した。

4. 研究成果

第一に挙げられるのは、(1)の書簡の整理を行い、簡易データベースを作成した点である。特に海外との交流については、海外の諸機関に保管されている書簡との照合により、全体像をほぼ把握できた。書簡整理作業は、平成24年から26年度まで継続して取組み、簡易データベース作成を完了した。

下書きや写しも含めた総数は5872点、このうち海外とのやり取りは363点であった。1951年が最初で、その後1957-58年に急増、1960年にピークとなっており、同年までの点数が全体のほぼ六割を占めている。続いて1968年までは、それまでよりも全体に点数が少なくなるものの、海外の美術関係者と書簡の取り交わしは恒常的になされていた。そして1969年から72年に吉原が没する時期は、俄に点数が減少していたことが判明した。もちろんこのたびの資料だけで結論づけることはできず、まだ発見できていないまとまった資料の存在も否定できないが、少なくとも吉原が1957年から1960年までに海外とのつながりを決定的に深めたことは明らかと言えるだろう。

その中心を占めるのが、マーサ・ジャクソン画廊およびミシェル・タピエとの間に交わされた書簡で、総数77点を数え、このうち1960年までのものがやはり多くを占め、9割近くに及んでいた。これらについては、(2)の海外調査資料と照合し、その重なりについて確認した。(2)の調査機関は、平成24年度はGetty・リサーチ・インスティテュートとニューヨーク近代美術館アーカイヴ、25年度はスミソニアンのアメリカ美術アーカイヴと、前年に引き続きニューヨーク近代美術館である。このほかニューヨーク州立大学バッファロー校に所蔵されているマーサ・ジャクソン画廊関連資料も確認できた。その結果、アメリカ美術アーカイヴには吉原と取り交わした書簡が11点、バッファロー校には55点存在し、(1)との重なりは、前者が8点、後者が31点と分かった。言い換えれば、全体としては国内外で少なくとも104点のマーサ・ジャクソン画廊およびミシェル・タピエ関連の書簡があり、全体の9割近くが1957-60年であった。

吉原は、1957年9月のミシェル・タピエとの出会いによって、欧米での発表の機会を得、

活動の場を広げて行ったことは知られて来たが、このたびの調査結果から、その交流は1960年までの約3年余りの間に急速に深まったことが具体的に裏付けされた。またマーサ・ジャクソン画廊やタピエ以外に、書簡をやり取りした美術関係者の数も、1958年以後急増したことが明らかになった。この簡易データベースは、著作権の関係などによりすぐに公開できる状況ではないが、将来大阪新美術館に設置が予定されている具体のアーカイヴに生かされるよう、同館と連携していきたい。

なお(2)の機関のうち、当初予定していたニューヨーク州立大学ポツダム校とパリのスタドラー画廊は、先方の都合で調査できなかったため今後の課題となる。また、実施した各機関のうち、Getty・リサーチ・インスティテュートおよびニューヨーク近代美術館アーカイヴでは、吉原ないし具体からの書簡は含まれていなかったが、具体から提供されたと見られる写真や、具体メンバーが参加した展覧会に関する資料を多数確認でき、海外での受容について考察する基礎資料を整えることができた。中でもニューヨーク近代美術館アーカイヴでは、具体メンバーというよりは一人の作家として個人的に、展覧会担当のキュレーターに書簡を送り、具体解散後も連絡を取り合った作家が存在したことを発見でき、グループを離れた作家個人の活動を考察するという新たな研究課題を明確化する上で有意義であった。

第二の成果としては、(1)のグタイピナコテカに関する資料について、平成25年度に簡易データベース作成を完了し、大阪大学総合学術博物館での「オオサカがとんがっていた時代--焼け跡から万博前夜まで--」展(平成25年4月7日~7月6日)および関連企画、また関連書籍として発刊した大阪大学総合学術博物館叢書9『戦後大阪のアヴァンギャルド芸術--焼け跡から万博前夜まで--』(大阪大学出版会、平成25年7月)で調査・考察内容を発表した点が挙げられる。グタイピナコテカとは、吉原が自身の所有する土蔵を作品展示ができるように改装して、1962年9月に一般公開した美術館である。メンバーによる定期的なグループ展・個展に加えて、親交のあった海外作家たちの展覧会も多数開催し、1960年代半ばには「来日する世界の美術関係者、あるいは前衛芸術家たちの必ず訪れる名所的存在」になっていた。

同館関連資料を整理した結果、全点数は120点(写真・映像のぞく)で、内訳は案内状・チラシ・出品目録・パンフレット等の印刷物が66点、それ以外の地図・名簿等の印刷物が14点、スケッチ・メモ等が40点であった。制作年は1962年の開館時までのものが約半数を占め、種類も多岐に亘っていることから、開館にあたっては入念に準備が進められたと推察できる。

これらの資料のうち主要なものを「オオサカがとんがっていた時代」展に出品した。終戦後から大阪万博開催の1970年直前までの時期に、大阪でどのような前衛的芸術活動が試みられたかをテーマにした同展では、三章の展示構成のうち一章をグタイピナコテカに充て、「中之島からの発信：グタイピナコテカ 1962-1970」と題してその全容を明らかにした。整理した資料は、グタイピナコテカで実際に展示された海外の美術作品や、その記録写真・映像と共に紹介し、グタイピナコテカの活動を多角的に捉えられるよう工夫した。

本展会期中には具体の実験的精神をより身近に感じてもらうことを目的として、トーク2回、ワークショップ1回の普及活動を行った。トークの第一回目は、6月1日に元具体会員の前川強氏と松谷武判氏を迎え、本研究代表者が司会を務めた対談「実験としての美術館 グタイピナコテカ」を実施した。当時の作品や展覧会のスライドを使いながら、グタイピナコテカでの活動を顧み、その意義を語り合っていた。第二回目は6月22日に具体の主要な研究者である平井章一氏と本研究代表者による対談「グッゲンハイム美術館でのGutai」を行った。ちょうど本展と会期が一部重なっていたニューヨークのグッゲンハイム美術館での「具体：素晴らしい遊び場所」展について、共に同展の諮問委員であった平井氏と、報告を交えつつ同展を見直した。そしてワークショップは、6月8日に元具体会員の堀尾貞治氏の指導で、それぞれの参加者が描いた絵を一つに合体させる「部分と全体」を開催し、同じ対象であっても人によって視点が異なることを、驚きと共に参加者に実感してもらう場となった。いずれの関連企画も、来場者が一般に分かり難いとされている現代美術への理解を深める好機になったと思われる。

上記の展覧会会期中に発刊した『戦後大阪のアヴァンギャルド芸術』でも、三章のうち一章をグタイピナコテカに充て、資料整理の成果として、これまで紹介されなかった資料図版を多数掲載した。また、論文「グタイピナコテカ--吉原治良の「傑作」としての具体美術館 その意義と課題」を執筆・収録し、グタイピナコテカとは吉原が具体結成後に試みた海外戦略のみごとな結実であったことを論述した。その他、「グタイピナコテカで紹介された海外作家」を図版と解説、資料写真を用いて解説し、「グタイピナコテカでの活動を中心とした具体美術協会関連年表」、「グタイピナコテカに関する主要参考文献」を作成・収録した。

これらの執筆・作成にあたっては、上述した資料整理調査の他に、研究の方法(3)で言及した元具体会員や関係者への聞き取り調査の内容を反映させた。聞き取りを行ったのは実施順に、平成24年度が元具体会員の向井修二氏、鍋倉武弘氏、前川強氏、そして

当時具体と深く接していた批評家の高橋亨氏、平成 25 年度が元具体会員の堀尾昭子氏、平成 26 年度が松谷武判氏、堀尾貞治氏である。高橋氏を除く各氏は皆、1950 年代末以降に具体へ参加し、1960 年代のグループの内実をつぶさに知る方々である。聞き取り内容は、グタイピナコテカや海外との交流に留まらず広く具体全般に及び、松谷・堀尾両氏以外はこれまでそのインタビューが公になっていないこともあって、貴重な証言を記録に残すことができたと考える。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 2 件)

加藤瑞穂「アメリカにおける戦後日本美術展 vol. 1」、平成 25 年度文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」(大阪大学大学院文学研究科主催)プログラム、2014 年 2 月 15 日、大阪大学会館(大阪府豊中市)

加藤瑞穂、高橋亨、向井修二「戦後大阪の美術とグタイピナコテカ」、大阪大学総合学術博物館創立 10 周年記念シンポジウム「大阪のアヴァンギャルド芸術」、2012 年 11 月 25 日、大阪大学中之島センター(大阪市)

〔図書〕(計 2 件)

正延敏、加藤瑞穂、倉科勇三共編、正延正俊作品集刊行委員会、『正延正俊 1911-1995』、2014 年、91(76-81) *論文「正延正俊の 1950 年代」

橋爪節也、加藤瑞穂編著、大阪大学出版会、『戦後大阪のアヴァンギャルド芸術--焼け跡から万博前夜まで--』、2013 年、96(22-37、70-91) *論文「グタイピナコテカ--吉原治良の「傑作」としての具体美術館 その意義と課題」

〔その他〕

ホームページ

展覧会「オオサカがとんがっていた時代--焼け跡から万博前夜まで--」

<http://www.museum.osaka-u.ac.jp/2013-04-27-4627/>

大阪大学総合学術博物館年報 2013(展覧会報告、pp. 9-12)

http://www.museum.osaka-u.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2014/12/MOU_2013_annual.pdf

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤瑞穂 (KATO, Mizuho)

大阪大学総合学術博物館・招へい准教授

研究者番号：70613892